

好色物の世界

西鶴入門 (下)

暉峻康隆



NHKブックス

342

暉峻康隆 (てるおか・やすたか)

1908年 鹿児島県に生まれる

1930年 早稲田大学卒

現 在 早稲田大学名誉教授

専 攻 日本近世文学

主なる著書 『西鶴評論と研究』『定本西鶴全集』

『現代語訳・西鶴全集』

NHKブックス 342

検印廃止

好色物の世界 西鶴入門 (下)

昭和54年5月20日 第1刷発行

著 者 暉 峻 康 隆

発行者 藤 根 井 和 夫

印刷 三 秀 舎

製本 明 泉 堂

装幀 栃折久美子

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町 41-1

郵便番号150 振替東京1-49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

好色物の世界(下)

西鶴入門

暉峻康隆



NHKブックス

342

©1979 Yasutaka Teruoka



梅やおせんうたさいもん元板

好色物の世界（下）

西鶴入門

目次

七 『好色五人女』(一)	9
--------------------	---

○五人女のモデルと構成 お夏清七郎事件の題材

主人と召使の恋 詠嘆する作者

八 『好色五人女』(二)	33
--------------------	----

炎の江戸娘 天和の江戸大火

薩摩のおまん

九 『好色五人女』(三)	59
--------------------	----

○姦通文学について 樽屋おせんの実説

創られたおせん像 意地づくの恋

おさんの実像 元禄のファッション・ショー

嘘から出たまこと

十『好色一代女』(一)	87
-------------------	----

第一のテーマ	第二のテーマ
--------	--------

『二代女』の時間設定	『二代女』の古典的構想
悲劇の開幕	

十一『好色一代女』(二)	109
--------------------	-----

セミプロ時代の一代女	プロへの第一歩
------------	---------

十二『好色一代女』(三)	129
--------------------	-----

良識との相剋	転げ落ちる石
悔恨の章	

十三 まとめの章	157
-------------------	-----

好色物シリーズのまとめ	好色物と近代文学
廓の成り立ちとメカニズム	西鶴のエピソード

卷末附録

『好色五人女』

卷四 大節李は思ひの闇

卷三 小判しらぬ休み茶屋

『好色一代女』

卷一 老女のかくれ家

卷六 皆思謂の五百羅漢

上巻内容

一 元禄文芸復興の基盤

二 西鶴の時代と生涯

三 『好色一代男』の世界(一)

四 『好色一代男』の世界(二)

五 『好色一代男』の世界(三)

六 『諸艶大鑑(好色二代男)』

卷末附録

七

『好色五人女』(一)

——第二の好色——

五人女のモデルと構成

西鶴は、ちょうど一年前の貞享二年（一六八五）二月に最初の典型的なモデル小説『枕久一世の物語』を発表しております。『好色五人女』はそれに続く、これまた典型的なモデル小説であります。貞享三年（一六八六）の二月に、この『五人女』を発表しましたとき、西鶴は四十五歳になっております。

『五人女』における好色は、内容的にいえば近代における恋愛という意味に相当します。いままでお話ししました『一代男』や『二代男』における好色は、金銭が介入する遊里における色道、粹という遊びの美学であり、エチケットでありました。それに対して『五人女』の好色は、金銭では手に入れることのできない、それぞれが情熱と命をかけた恋でありますから、これはまったく野暮な素人の恋、つまり一般の市民社会における恋愛ということになります。

そもそものが、治外法権であった遊里と違い、封建社会にあつてはどんなにまじめな恋愛でも、親や主人が許さないかぎり不義、いたずらと考えられていました。この時代におきましては、若者の初恋でも、人妻の恋愛でも、かれこれ差別をつけないで、とにかく不義密通とされただけでなく、道徳的にも法律的にも制裁された時代です。

そういう時代における若者たちの恋愛事件を、モデルにした作品であります。

『五人女』は、そのタイトルの通り、当時の流行歌や歌舞伎などで世間によく知られていた五組

の恋愛事件を取りあげたものです。

まず最初は、巻一の姫路のお夏が、処刑された恋人清十郎のあとを追って心中したという事件です。作品で西鶴は、これを心中事件として扱っておりません。『五人女』は貞享二年下半期の執筆ですから、そのときから約二十年以前の1660年前後、寛文初年の事件と諸書が伝えており、また寛文四、五年ごろから江戸で「清十郎ぶし」が流行したという記録もあります。すこし話とびますが、最終の巻五の薩摩のおまん源五兵衛の恋物語も、お夏清十郎と同様に約二十年前の寛文初年の事件で、これまた記録は「おまん源五兵衛心中事件」として伝わっております。

西鶴は元来、近松と違って心中を好意的にみておりません。前作の『好色二代男』巻八の「流れは何の因果経」の章で、この頃義理だ、情だといって、遊女と客がちよくちよく心中するけれども、あれは金に詰まって死ぬのであつて義理でも情でもない、浅ましい最期だ。男も女もれっきとした者は、たとえ恋を捨てても心中などはしないものだ、といっているくらいであります。そこが一世代ちがった近松と西鶴の相違なんです。

『五人女』でも、巻一と巻五においては二十年以前の心中事件を、まるつきり心中とは無関係な作品に仕立てあげております。

巻二の大阪の樽屋おせんの姦通事件は、ちょうど一年前の貞享二年の正月に樽屋の女房おせんは自害、間男まおとこの長右衛門はまもなくつかまって処刑されたという、ホットな地元の一件です。

巻三は京都の大経師だいきょうしおさんの姦通事件。大経師と申しますのは、禁裏の御用を勤めた表具師で、

大経師曆を発行する権利を与えられていた業者です。その大経師の女房のおさんの姦通事件で、これは天和三年に処刑されておりますから、ちょうど二年前の事件です。

巻四は江戸の八百屋お七事件。これはいまでもポピュラーなお七吉三郎の恋物語で、巻三の大経師おさんの事件と同じく、天和三年三月に鈴が森で火刑に処せられた事件です。ともに刊行当時から二年前のトピックです。

というわけで、これを展望しますと、巻一と巻五が二十年ぐらい以前の旧聞に属する事件、巻二、三、四が一年から二年以前のホットな恋愛事件と、ちゃんと時間的な配慮をして西鶴は編成しております。

地理的にも、巻一が姫路、巻二が大阪、巻三が京都、巻四が江戸、巻五が薩摩というふうに、今年正月に発表した『西鶴諸国ばなし』と同様に、諸国ばなし的な配慮がなされています。

次にまた『五人女』は、各巻五章で五巻という構成です。この構成についてはいまままでいろいろ解説されています。

序、破一段、破二段、破三段、急と称する能の五段組織にもとづいたというのが、私の恩師山口剛先生の説です。それから学問仲間の野間光辰の五人女を主題とした「歌祭文」に拠ったのではないか、という説があります。歌祭文というのは、時々トピックを歌謡風に綴り節をつけて売り歩いた読売りで、たとえば「大経師おさん」の歌祭文に、「京でおさんと好色の五人女の一の筆」などがあるからなんです。しかしこれも刊行年代がはっきりせず、『五人女』より先に出たという確証

がありませんので、今のところ仮説の域を出ません。

そこでというわけではありませんが、西鶴は『五人女』を執筆する直前の貞享二年正月に『暦』という五段組織の浄瑠璃を、当時の浄瑠璃界の第一人者であった京都の宇治加賀掾かがのしろうのために書いて、道頓堀で上演しております。実はこの浄瑠璃を上演する二カ月前の十月に、奈良時代らしい千年ほど中国伝来の暦を使っていた日本が、天文学者の保井春海やすい しゅんかいが京都の子午線しごせんにもとづいて作った、科学的で正確な暦を朝廷も幕府も採用し、「貞享暦」^{じようきやうれき}と称することになったのです。暦というものは、当時の日本人にとっては、日常欠くことのできない存在で、冠婚葬祭から農耕にいたるまで、すべてこれを見ないと身動きができない状況でした。それが一変して新しい暦になりましたので、全国的トピックになった。それを西鶴はとりあげて、新作浄瑠璃『暦』を書いて道頓堀で上演したというわけです。

そしてその『暦』はもちろん、五段形式であります。ですから、それから一年もたたないうちに『五人女』を書くときの西鶴の頭の中に『暦』の五段形式があり、それにもとづいて当時の恋愛事件の中でもっともポピュラーな五つの恋物語をまとめたと考えるのが、現実的で理にかなっているというのが私の考えです。

お夏清十郎事件の題材

さて、巻一の「すがたはひろち姿姫路清十郎物語」を鑑賞するに当たって、先にもちょっとふれました題材のあらましを見ておきたいと思います。モデル小説ですから、もちろん実説とは言えないまでも素材が存在したわけであります。執筆当時からはば二十年以前の事件であることは、すでに申し上げました。

まず事件のあらましを述べた資料として、前にちよつとふれました読売りの歌祭文うたざいもんがあります。それによりますと、姫路の米問屋こめどんや・但馬屋たしまの娘お夏は、手代てだいの清十郎と恋仲であったが、それと知らぬ親はお夏の縁談をきめてすでに結納ゆいのうも取りかわし、勘七という重手代おもてに嫁入り道具の代金を渡したので、勘七はその金を横取りし、親方へは「清十郎が嫁入りをさまたげるために金を盗み、それゆえ道具が調いません」と讒訴ざんそしました。そこで親方は清十郎を恩知らずとのしり、追い出すことにしました。清十郎は勘七を殺して自分も死のうと、その夜勘七の寝室へ忍び込んだのですが、暗がりくらで手代仲間の源七とまちがえて刺し殺し、その場を立ちのきます。その後、清十郎がつかまった事を知って狂い出したお夏が、ある日はからずも清十郎処刑の松原にさしかかり、清十郎が非人の槍先にかかつて果てたのを見て、お夏も側にあったその槍で喉のどを突いて跡追い心中をした、というのがあらましです。